

地域通貨の現代的意義と可能性

I

THIS NOTE IS
USEFUL TENDER FOR
MANY LOCAL NEEDS

H 245368

地域通貨とは何か

過去、現在、未来

泉 留維

(都留文科大学非常勤講師)

Key Word

1

石貨／互酬／領土内貨幣／政府紙幣／スタンプ貼付型

1 ●ヤップ島の石貨

その昔、アニメで原始人が車輪の形をした巨大な石を転がして、買い物に行くのを見て、小さいながら「なぜあんなに不便なものか」と思ったものである。現在では、私たちは、ポケットに入る程度の大きさの紙や金属でできたもの、時にはプラスチックでできたもので日々の生活をすごしている。では、人の背をも超えるような石のお金はアニメの世界の中だけの存在であったのだろうか。実は、遙か昔でもなく、たつた今、ミクロネシアのある島で使用されているのである。そして、逆に原始時代にはそのようなお金はなかったのだった。

車輪の形をした石のお金、それは一般に石貨といわ

貨幣の機能や目的は、世界的にも歴史的にもさまざまである。ヤップ島では石貨とUSDドルが手段によって使い分けられているし、過去の日本では儀式用の貨幣もあった。出口の見えない不況のなかで、各地に広がりを見せる地域通貨はどんな意味を持つのだろうか。



目次

農業と経済 2003.5 臨時増刊号

地域通貨の可能性を探る——地域経済、コミュニティの再生をめざして

I 地域通貨の現代的意義と可能性

- | | | |
|----|--|------|
| 5 | 1 地域通貨とは何か
——過去、現在、未来 | 泉 留維 |
| 15 | 2 地域通貨が現代経済に問いかけるもの | 中村 修 |
| 23 | 3 コミュニティづくりと地域通貨
——スローコミュニティと地域通貨が担う次なる時代に向けて | 田村 馨 |
| 32 | 4 地域通貨の意義とコミュニティファイナンスへの応用可能性 | 斎藤成人 |
| 41 | 5 地域通貨の実践
——発行の手順と方法 | 奈良 環 |

II 地域通貨と農業・農村

- | | | |
|----|---|------------|
| 57 | 1 食農連携の推進と地域通貨
——とらね農業協同組合と元気やさいネットのこと | 片柳義春 |
| 66 | 2 地域通貨による地産地消の可能性 | 波野野豪 |
| 75 | 3 農村経済の再構築と地域通貨の可能性 | 日暮賢司 |
| 83 | 4 農村社会における地域通貨のとりくみ | 大江徹男・重頭ユカリ |
| 92 | 5 JAにおける地域通貨活用の可能性
——農本位制による農業・農村の再生に向けて | 山本雅之 |

III 欧米における地域通貨の実践

- | | | |
|-----|--------------------|------|
| 100 | 1 ●特別 北米発の地域通貨システム | 編集部 |
| 104 | 2 ヨーロッパの地域通貨 | 川野英二 |

IV 全国各地に広がる地域通貨

- | | | |
|-----|-------------------------------------|------------|
| 113 | 1 町民起点のエコマネー クリン 北海道栗山町 | 出南 力 |
| 118 | 2 これからのまちづくりと循環型農業へ ビーナッツ 千葉県千葉市 | 村山和彦 |
| 123 | 3 共生と助け合いの社会へ ハートマネー 長野県南安曇郡穂高町 | 白井健二 |
| 131 | 4 衰退した商店街が見出した新たな価値 EGG 静岡県清水市 | 野口直秀 |
| 136 | 5 姫路ITエコマネーアクション
千姫プロジェクト 兵庫県姫路市 | 岡田真美子・熊丸 拓 |
| 142 | 6 みんなの夢をかたちに！ 蛋都くらぶ・ま〜ゆ 長野県上田市 | 安井啓子 |

特別論稿——ミヒャエル・エンデから学ぶ

- | | | |
|----|-----------------------------------|------|
| 50 | エンデが描いた未来地図
——『エンデの遺言』が投げかけた波紋 | 川邑厚徳 |
|----|-----------------------------------|------|



2 ● 互酬・交換・再分配

このような貨幣の使い分けは、社会的相互関係で結合した絆、つまり貨幣の世界において端的に表せば、それは取引網という言葉に集約されるネットワークの

のだ。

石貨は人びとの前に誇らしげに飾られ、展示されており、みずからの領域に持ち運んで所有権を明示するのではなく、当事者および周囲の認知によって所有権が移転する。通常の商品取引は、その取引が成立した時点でお互いの関係性は消滅し切り離されるが、石貨による取引では、石貨そのものに前の持ち主の存在が一部残り、石貨の移転に伴った歴史が刻み込まれていくのである。石貨にはそれぞれ人格があり名前があるのだ。

呪師に対する献供など、社会生活のあらゆる側面で「支払手段」として使用されている。だが、タロイモや魚、欲しい腰布を買うような商品交換としては、石貨は使用されない。商品売買には石貨よりずっと後に流入してきた貨幣、現在ではUSDollarが用いられる。ヤップ島では、交換手段と支払手段が別々の貨幣によって担われているのである。



写真1 ヤップ島の石貨。(提供) 田中拓弥

れるものである。ミクロネシア連邦のカロリン諸島西部にあるヤップ島(陸地総面積101平方キロメートル)で使われている中央に穴をあけた円板状の石である。石は、ヤップ島から南西約500キロメートルのパラオ諸島マラカル島に産出するライム・ストーン(結晶石灰石)であり、そこからカヌーなどで運ぶのである。直径20センチのものから、直径4センチ、重さ5キログラムのものまである。この石貨、いつから使用されているかは定かではないが、少なくとも18世紀の白人の到来まではさかのぼれる(Furness「1910・96」)。アメリカの人類学者ウィリアム・ヘンリー・ファーンズ(William Henry Furness)が、1903年に当時ドイツの植民地であったヤップ島に数か月滞在し、石貨についてみずからの驚きを本にまとめており、日本の植民地になった後、矢内原忠雄が、1933年にヤップ島を訪れ、石貨について詳しい記述を残している。常に部外者にとつては不思議としかいえない存在であったようである。

では、石貨はどのような場面で、どのような目的で使用されるのか。一般に食料品や装飾品などの商品の購入に使用されるのではなく、たとえば、石貨は、結婚の時に、花嫁の親族から花婿の親族に贈られたり、紛争の和解や贖罪、カヌーや家屋の建造に対する謝礼、

違いに依存している。それぞれのネットワークでは、それぞれの経済を制度化している仕組みが機能している。カール・ポランニー(Karl Polanyi)「1975・63-73」の論に従えば、それは3つのパターン、交換・再分配・互酬に分けることができる。交換とはラダムに配置された多数の点の間におけるモノ・サードの自由な移動(任意の主体間での財の移動)のことであり、市場における匿名性を帯びた人びとの間でのやりとりである。次に再分配とは、中心点の周囲に配置された諸点から中心に向かい、そこから再び諸点に戻るモノ・サードの移動(社会の中心への財の集積と中心から周囲への財の移動)のことであり、中央権力による富の集中と分配という経路を通じたやりとりである。最後に互酬とは、対称軸の両側に配置された諸点の間で、対称軸をまたいでおこなわれるモノ・サードの移動であり、対照的な集団もしくは個人の間で特定のパターンに従って贈与しあうやりとりである。

この枠組にヤップ島を照らし合わせると、石貨は互酬の世界で用いられている貨幣、USDollarは交換(市場での取引)と再分配(徴税と公共事業など)の世界で用いられている貨幣と見なせよう。互酬は、贈与によって負債を生み出し、その負債から生じる義理と、義



理による返礼としての対抗贈与の応酬を基本メカニズムとし、社会関係を連鎖的に持続していく仕組みである。石貨は、共同体内での信託関係を醸成したり、ある時には当該社会における権力やステータスを獲得したりするための目的が限定された貨幣ということができる。どのような目的であれ同じ貨幣を用いることは、とりもなおさず市民一人ひとりが同じ社会共同体の一部であることを強調するものとなるのはいうまでもない。

貨幣は、もちろん価値を測る手段であり、価値を貯める手段であり、価値を交換する手段であるが、必ずしも常にその3つの手段を内包しているわけではなく、また別の手段、石貨の場合は価値を支払う手段のみを持っていることもある。石貨は地域における社会関係の維持を図るために、その昔に住民により設計され、円やドルといった貨幣もまた市場での交換や富の再分配をおこなう媒介としてこれまで何度も設計し直されてきている。貨幣は人間自身が社会に埋め込んだ制度である限り、本来的にその目的に応じて設計するものである。

では今日、私たちが、円やドルといった貨幣とは別個の存在として、設計し導入している「地域通貨」と存在している。それは先述の石貨だけではなく、数多くの事例がある。歴史的に見ても貨幣需要は非常に多様性、たとえば厭勝銭などといった宗教的儀式用や地域内（内部）決済用と地域間（外部）決済用など、があり、領土内貨幣をもってすべての需要に応じるのは困難で、また機能的に応じることが適わない場合もある。重層的である経済社会において、貨幣の独占化が安定した唯一の理想形態とはいいがたく、その意味で、イギリスにおいて1844年に銀行条例が施行され、国家「国民」単一貨幣（領土内貨幣）という神話的構図が完成し、その汎用性が高まっていく流れの中で、地域通貨という存在を認識して、その機能や目的、役割には注視せざるをえないであろう。

(2) 地域通貨の目的

このように19世紀に領土内貨幣が確立して以降、過去および現在において世界各地でとりくまれた地域通貨を視察すると、地域通貨を発行する目的を次のように大きく3つに分けることができる。

①貨幣代替…中央銀行が負債として発行する貨幣システムとは異なるシステムで、市中一般で使用される貨幣を発行するものである。その狙いは、現行の領土

は、どのような性質を持つものなのであるのか。

3 ● 地域通貨のさまざまな力たち

(1) 領土内貨幣と地域通貨

地域通貨は、その名の通り、国家という領域の中で、ある特定の地理的範囲でのみ有効な貨幣を指しているが、その目的や形態に注視すると、単純に地理的範囲を限定したものとはいえない多様性を見つけることができる。市場における貨幣は、19世紀に入り、世界的に領土内を絶対支配する民族国家を基本単位として排他的に発行されるようになり、第一次世界大戦までは、世界のほとんどの国で領土内貨幣（territorial currency）として確立する。それまで多数の民間銀行が自由に銀行券という貨幣を発行していたが、イギリスにおける1844年のピール銀行条例（Bank Charter Act 1844）の施行に端を発して、たった一つの銀行、いわゆる中央銀行のみが発行できるようになったのであった。

このように表の貨幣の歴史ともいうべきものがある一方で、地域やコミュニティベースでの、必ずしも市場で用いるとは限らない裏ともいえるべき貨幣の歴史も内貨幣システムの不安定性や信頼性の欠如といった問題を取り越え、また域内的な視点で貨幣量を管理するためであり、流通領域を限定し、完全代替もしくは部分代替として導入される。

②特定領域内での経済活動の活性化…中央銀行が発行する領土内貨幣を補完する形で発行される。持ち越し税がかけられたり、有効期限が設けられたり、預金通貨化できなかったりと、領土内貨幣にはない特性を内在する。基本的には、領

表1 目的別による地域通貨の分類

目的	価値基準	使用方法	価格決め	事例
①貨幣代替	財バスケットや領土内貨幣などに準ずる	単独、領土内貨幣との併用	市場により決定	コンスタント（アメリカ） パタゴン（アルゼンチン） イギリスの属領貨幣
②特定領域内での経済活動の活性化	基本的に領土内貨幣に準ずる	基本的に領土内貨幣との併用	市場により決定	1930年代の補完通貨（欧米） イサカアワーズ（アメリカ） トロントダラー（カナダ）
③ボランティア活動の評価、コミュニティの活性化	時間や財ベースに準ずるものが多い	単独で使用されることが多い	基本的に相対により決定	タイムダラー・LETS（欧米） 時間銀行（イタリア、中国など） 日本の多くの地域通貨



土内貨幣と併用・補充して使用され、域内での経済循環を作り上げて、今まで以上にモノ・サービスの地産地消をおこなっていくための先鞭として位置づけられる。

③ ボランティア活動の評価、コミュニティの活性化・領土内貨幣システムとは基本的に切り離され、ボランティアやアンペイドワークといったコミュニティ内で必要であるが、貨幣評価が難しいインフォーマルな経済領域で導入されるものである。基本的に取引は相対でおこなわれ、その際の価格づけメカニズムは互酬を基礎とし、必ずしも需要と供給の関係の中で決定されない。市場での「売買」の貨幣としての領土内貨幣を補充するものではなく、域内での「交流」を促進する道具として位置づけることができるものである。

(3) 領土内貨幣を代替する地域通貨

① の地域通貨には、既存の領土内貨幣に取って代わる、もしくは並行する貨幣システムを作り上げることが目的としてある。たとえば、2002年のインフレ率は40%を超え、失業率は10%台後半という危機的な経済状況にあるアルゼンチンでは、一種の政府紙幣 (state money) として、パタコンと呼ばれるプエノス

スコットランドで3種類、北アイルランドで4種類の独自の銀行券が域内で法定通貨として流通している。

さらに連合王国 (the United Kingdom) の一員ではないがイギリスに属している王室直轄属領 (British crown dependency)、マン島やチャネル諸島においては、各地方政府が独自の紙幣を発行し、島内で循環させている。たとえば、チャネル諸島のガーンジー島を中心としたガーンジー政府 (2001年の人口は5万9807人、名目GDPは13億ポンド) では、1816年にガーンジー政府が6000ポンド相当を発行して以来、税収を裏づけにして発行され続け、2001年12月時点で2145万ポンド相当のガーンジー政府紙幣が、イングリランド銀行券と並行して流通している。これらのような貨幣もまた地域通貨の一つのあり方といえよう。

(4) 地域経済およびコミュニティの活性化としての地域通貨

② の地域通貨は、領土内貨幣を補充し、主に特定域内での経済循環を作り上げることが目的である。歴史的に見ると、このタイプの地域通貨が、1930年代前半に欧米各地でさかんに導入されている。世界的な

アイレス州の州債 (2006年11月13日に年率7%の利息をつけて州政府が償還予定) が2001年8月下旬から流通しはじめている。これまで16億ペソ相当のパタコン紙幣を印刷、15万人以上いる公務員への給料支払いや出入り業者への支払いとしてまず使用され、市中のほとんどの商店にはじまり、税金の支払いや市役所の諸処の手数料、高速道路料金 (全額) や鉄道料金 (全額)、電話や水道などの公共料金 (30%程度) などでパタコンを使用することができるよう。パタコンは、市中での使用ではペソと等価であるが、ドルやユーロに對してと同じく内国ながら為替市場が成立しており、2003年2月14日時点で、1パタコンを0.985ペソで売ること (買いは0.995ペソ) ができる。

現在、全国24州中15の州で地方債が、貨幣として流通している。そして、このような準通貨として流通している地方債 (連邦政府債レコブも含む) は、2001年12月末に26.7億ペソ相当であり、現金通貨 (ペソ) に対する比率は26.2%であったが、2002年3月末には51.3億ペソ相当、比率は37.5%までに上昇している。

また、イギリスにおいては、領土内貨幣のイングリランド銀行券の準備高の規制範囲という条件はあるが、

デフレ不況の中で、流通が滞った領土内貨幣を補うものとして、時の経過とともに減価する仕組みを内在し、一定期間毎に紙幣に額面の数パーセントのスタンプを貼る地域限定の補充通貨が、地方政府および地域の商工会議所などを中心に発行されたのであった。国家単位では管理しきれない空間的な広がりである個々の地域の流動性を確保しようとしたものである。1930年代のとりくみは、直接的には現在の地域通貨には関係していないが、イサカアワーズやトロントダラー (111頁参照・編集部) などともまた、若干趣に違いはあるものの、地域にある能力や資源を可能な限り内部で保持し、循環させて、独自の経済圏構築をめざしている。

③ の地域通貨は、ボランティアやアンペイドワークといったコミュニティ内での活動を独自の基準で評価し、その活動をコミュニティ内で持続的にこなしていくことが目的である。互酬の仕組みが基本にあり、その仕組みは、個人もしくはコミュニティの利害や感情の反映からなるものではなく、その単位となるコミュニティの凝集と個人間やコミュニティ間の連帯を同時に生み出すものと見なせる。現在の国内外の多くの地域通貨は、この③を主目的として導入しており、アメリカのタイムダラーやイギリスの時間銀行は、政府

から資金援助を受けて活動をおこない、そのクレジットは非課税扱い、社会保障給付において所得と勘定されないことになっている。

当然ながら、現実の地域通貨のすべてが①、②、③のどれかに必ず分類できるわけではない。

4 ● 不況と地域通貨

今日、貨幣が国際的に、ドル、ユーロ、そして円という3つの貨幣に寡占化し、また多くの国では他国の貨幣の影響下におかれること（外貨の全面的採用やベック制導入など）で、貨幣の取引網が作り上げる社会空間に大きな影響を及ぼしている。たとえば、領土内貨幣が本来強く含有していた政治的アイデンティティの強調は、一部を除けばかなり変質もしくは後退しつつあるといえよう。その中で、地域通貨は、単なる地域内の交換の媒介ではなく、国家よりさらに小さい単位である地域やコミュニティのアイデンティティを強調する道具として位置づけることができる。それは、イサカアワーズのような紙券を用いる場合には、紙券に地域の自然環境や経済をイメージする写真や標語を載せ、LETS (Local Exchange and Trading Systems)

債券の本券部分は地域限定の通貨であるが、税である印紙部分は円である。これによりこの通貨は流通しながら、期限が来ると負担された税で償還され消滅するか、または新規の債券と交換され再び地域に出回る。

このような地域通貨を、たとえば、事前に資金を持たない地方自治体が公共事業をおこなう際の代金として発行した場合、通貨を使用した住民による薄くて幅広い税で結果として意図した事業がおこなわれたことになる。これ以外にも、消費を刺激するために、住民へ購買力を直接注入するという国民配当 (national dividend) として、また最低限の生活保障をおこない、賃労働だけではない仕事の多様化を促進する基礎所得 (basic income) 給付として発行する方法も考えられる。

このような政策は、財政の自由度が低下した自治体や荒廃しつつある地域にとっては考慮に値するものであり、地域の視点に立った経済を鑑みるうえで新しい視野を開いてくれるであろう。

参考文献

- Furness, W. H. The Island of Stone Money, Philadelphia, J.K. Lippincott, 1910.
- Gilbert, E. and E. Helleiner (ed.), Nations-states and Money,

のような紙券を用いないタイプでは、その通貨単位に地域の特産物や名所などを用いることからわかる。

日本では今のところ、通帳や紙券、借用証書といったさまざまな形式をとりながらも、コミュニティの活性化というインフォーマルな経済領域で使用される地域通貨がほとんどであり、これまで全国130か所以上で導入されている。経済成長優先で切り捨ててきた地域や人とのつながりを取り戻し、「お金で買えない豊かさ」を得ようとしているのである。ただ、この先行きが見えないデフレ不況と地方自治体の深刻な財政状況を鑑みれば、1930年代に欧米でとりくまれたスタンプ貼付型の地域通貨を試みてみることも一案であろう。小泉内閣が推進している構造改革特区では、3つの自治体が地域通貨に関して申請するなど、すでに自治体主体の地域通貨のあり方にも議論が及びつつある。

地方自治体が債券を発行し、それを地域通貨的に使用することにより購買力が地域外に出るのを止め、域内での経済循環の促進を狙うのであるが、この時、一定期間毎に地域通貨に額面の数パーセントの印紙を貼ることを義務づけるという持ち越し税をかけることが重要となる。長く持てば持つほど税を払う必要が生まれるため、所有者は一刻も早く使用することになる。

京都 フィールドワークの ススメ

——あるく・みる・きく・よむ——
鶴飼正樹・高石浩一・西川祐子 編著
A5判・並製・208頁 本体価格1900円



昭和堂

山ほどある「京都本」の世界に、京都の大学に足場をおくフィールドワーカーたちが挑戦した。「歩く」「見る」「聞く」「読む」の技を手に、好奇心の赴くままにフィールドワークする。本書は新しいチャレンジや創意工夫への誘いの書でもあるのだ。

地域通貨の現代的意義と可能性

I

THIS NOTE IS
USEFUL FOR
MANY LOCAL NEEDS



地域通貨が現代経済に
問いかけるもの

中村 修

(長崎大学環境科学部助教授)

Key Word

循環型社会／無限の自然／知的センス／生態学
熱力学／エントロピー増大則／劣化する貨幣

2

注
(1) ボランニー(1980年)は、地域での生活の一部とな
っている地域市場と、対外取引を通して物流をおこな
い、需要供給の競争メカニズムにもとづく対外市場とが、

the Past, Present and Future of National Currencies,
London: Routledge, 1999.
Seyfang, G. and K. Smith, The Time of Our Lives: Using
Time Banking for Neighbourhood Renewal and
Community Capacity Building, London: NEF, 2002.
泉留維「地域通貨いろいろ」『季刊未来経営』2002年秋
号、24—31頁。
牛島巖「ヤップ島の社会と交換」弘文堂、1987年。
カール・ボランニー「大転換」東洋経済新報社、1975年。
カール・ボランニー「人間の経済」I・II、岩波書店、19
80年。
黒田明伸「貨幣システムの世界史」岩波書店、2003年。
坂本龍一・河邑厚徳編著「エンデの警鐘」日本放送出版協会、
2002年。
ジェイムズ・ロバートソン「21世紀の経済システム展望」日
本経済評論社、1999年。
丸山真人「市場と貨幣を地域から問い直す」『月刊自治研』2
002年4月号、16—24頁。

まったく別個に発生したとする。そして、汎用性が高く、
共同体を超えて流通する対外貨幣と、特定目的を持ち、
共同体内部でのみ意味をもつ対内貨幣のように二分され
ていたとみなしている。具体的事例については、たとえ
ば黒田(2003年)を参照。
(2) ちなみに2001年の一般財源に組み込まれた貨幣発行
にともなう収入は117万ポンド、全体に占める割合は
約0.6%である。
(3) ドイツのシュヴァンギルヒェンやオーストリアのヴェ
ルグル、アメリカのリーディングでの事例が有名である。
詳細については、泉(2002年)を参照。
(4) イサカアワーズの紙幣には、「イサカアワーズは、われ
われの富を地域で循環させることによって、地域のビジ
ネスを刺激し、新しい雇用を創出しようというものである。
イサカアワーズは、われわれの技術、われわれの時
間、われわれの道具、われわれの森林・土地・川などの
真の資本によって支えられている」と書かれている。

現代社会は、自然を消費・破壊する石油採掘を「生産」
とよび、持続的成長が期待されている。「無限の自然」
を前提とした現代の貨幣に対し、時間とともに価値が
減少する貨幣が、地域通貨である。自然と共生できる
社会が、地域貨幣に期待されている。

1 地域通貨による
循環型社会への取り組み

わたしは、地域通貨を利用した循環型社会への試行
を福岡県大木町でおこなっている。ここでは、生ゴミ
の循環利用が主目的であって、地域通貨は、そのため
の道具でしかないが、簡単に紹介する。

現在、大木町はこの農村にも見られるよう、農村
でありながら学校給食で地元の農産物はほとんど使わ
れていない。スーパーでも地域外、輸入農産物が大量
に販売されている。しかも、大半の農地では化学肥料
が使われ、堆肥などの有機肥料が使われることは少な
い。

町の外から化学肥料や農産物といった商品が持ち込